

# ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における 「声」の神学

土 井 健 司

## はじめに

古代キリスト教が息づいた空間においてどのような音が響いていたのか。たとえば聖書朗読はどのような響きとして経験されたのか。しかし声や音は発話の瞬間に消えてしまい、1700年も前の古代キリスト教世界における音や声の響きを研究するといったことは、いわば見果てぬ夢であろう。それでも、そこに少しでも近づきたいというのが研究の根底にある情熱である。いろいろなアイデア・仮説の類は思い浮かぶとしても、研究である以上、限定に限定を重ねて、具体的に遂行しなければならない。そこで、ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』<sup>(1)</sup>において、φωνή（声・音）という語がどのように使われているのか、どのような意味で用いられているのか、これが本稿の問いとなる。それにしても、なぜ『雅歌講話』なのか。それはこの講話を読んでいくとかなりの箇所でφωνήが使われているからであり、また雅歌自体のなかに繰り返しφωνήが使われているからである。一つの言葉の使用法というとき、まずはその意味の如何が問題となろう。一般的にこの語が「声」と「音」の双方の意味をもつとしても、どのような「音」、さらにどのような「声」が理解されているのかはその著作における用法を丹念に調べてみなければならない。この研究を通して、果たして何かわれわれが気づかなかった新しい知見がもたらされるのかどうか、これは研究を遂行してみなければわからない。

この言葉について筆者はすでに二つの研究を公刊しているが、いずれもθεία φωνή（神の声）という語句に関するものでニュッサのグレゴリオスに

ついでひとつ<sup>(2)</sup>、またバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスについてひとつとなる<sup>(3)</sup>。これらの研究では直接 *θεία φωνή* について研究したが、いずれも用例を網羅的に集め、一つひとつのテキストを分析してその用法を確認していった。これらを通して端的にこの語句が意味するものを調べた。これらの研究を踏まえて、本稿では『雅歌講話』という著作を対象として研究を遂行していきたい。

ちなみに *TLG*<sup>(4)</sup> を用いてバシレイオス、ナジアンゾスのグレゴリオス、そしてニュッサのグレゴリオスの三教父について *φωνή* の用例を調べてみた。その用例数のみを挙げるなら、バシレイオスは 525 例、ナジアンゾスのグレゴリオスは 161 例、ニュッサのグレゴリオスでは 1018 例となる。それぞれの残存する著作数も考慮すべきであるが、ニュッサのグレゴリオスの用例が群を抜いて多いことが確認される。ここから何かしら「声」の神学とよばれるようなものをグレゴリオスが構想していたと結論するのは早計にすぎるとしても、何か特別なものを予感することは許されるであろう。

## 1. 『雅歌講話』における *φωνή* の用例の概観

『雅歌講話』はその執筆年代が定かではないものの、研究者の間では『モーセの生涯』と並んで晩年のものとされている。その冒頭を見るとこの著作はオリンピアスという女性に宛てられており、彼女が雅歌について熱心にその意味の開示を求めたことがきっかけでグレゴリオスは執筆をしたという。ただしオリンピアス個人のための講話ではなく、「より自然の状態にある人びとにとって魂の靈的かつ純粋な境位への導き」(4, 7f)<sup>(5)</sup> となるように記されている。全体は十五の講話から成っており、聖書解釈論を扱った序言につづいて、第一講話から雅歌の言葉の講話に入っていく。以下各講話が取り上げる雅歌の章節を挙げておく。

第一講話 1 章 2 節から 4 節

第二講話 1 章 5 節から 8 節

第三講話 1 章 9 節から 14 節 \*花婿の言葉（声）がはじめて登場する

- 第四講話 1章15節から2章7節  
第五講話 2章8節から17節 \*冒頭で「私の恋人の声がある」からはじまる  
第六講話 3章1節から8節  
第七講話 3章9節から4章7節  
第八講話 4章8節から15節  
第九講話 4章10節(b)から15節 \*前講話と重複した箇所  
第十講話 4章16節から5章2節  
第十一講話 5章2節(b)から7節 \*「恋人の声が扉を叩いています」からはじまる  
第十二講話 5章5節から7節  
第十三講話 5章8節から12節  
第十四講話 5章13節から16節  
第十五講話 6章1節から9節

以上となるが、雅歌はLXXにおいても8章14節までであるので、講話は雅歌の途中で終わっていることになる。また第五講話と第十一講話では「恋人の声」が主題となってはじまっている点が注目される。

さてニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』について、φων-で検索した結果、163例が上がってきた。その内訳は結果順にすると、φωναι(複数主格)が3例、φωναις(複数与格)が3例、φωνας(複数対格)が15例、φωνει(動詞)が1例、φωνη(単数主格)が35例、φωνη(単数与格)が6例、φωνην(単数対格)が49例、φωνης(単数属格)が48例、φωνητικα(形容詞)が2例、そしてφωνων(複数属格)が1例、以上となる。これら163例が今回の研究の対象となるテキストである。そしてそれを調べた結果が巻末に掲げた表である。稿を進めるにあたり、この表を参照しつつ、表に付した用例番号を挙げることにする。

ところで以前に公刊したニュッサのグレゴリオスの「神の声」に関する研究は、彼の著作全体を検索し、θεια+φωνηの用例を調べた。そこでは『雅歌講話』(GNO6)については4例、すなわち第五講話(p.140, 13)、第五講話

(169, 12)、第十講話 (310.12)、第十四講話 (414.7) が上がってきたので調べてみた。しかし今回の検索では『雅歌講話』における  $\theta\epsilon\iota\alpha \phi\omega\nu\eta$  の用例は 10 例が確認されている。今回掲載した表番号の 3 番、10 番、36 番、57 番、60 番、66 番、73 番、103 番、142 番、162 番の各番号のテキストである<sup>(6)</sup>。これらのうち 36 番、60 番、103 番、142 番は前の論文で扱ったテキストである。そこで 3 番、10 番、57 番、66 番、73 番、162 番の六つのテキストについて前の論文の結論について確認をしておく必要がある。その結論を繰り返すなら下記二点となる。

第一に「ニュッサのグレゴリオスにおいて「神の声」は、もっぱら聖書を指すものとして使われている。これに例外は認められない、

第二に「「神の声」が何かしら働きをなすときには、その働きの現在性が意識されている。それは、おそらく礼拝の場における聖書朗読のことであって、礼拝において神は会衆に向かって「語る」のであり、「教える」のであり、「約束する」等などの働きをなす」、以上の二点が先述した論文の結論となる。

そこでまず 1) について見てみよう。3 番では「聖書の言葉」、10 番は「雅歌の言葉 (全般)」、57 番は具体的な箇所、また聖書全般とも述べられてはいないが、シメオンの言葉 (ルカ 2 章 29 節以下) が直後に引用されるなど何かしら聖書 (の言葉) が想定されている。66 番は雅歌 3 章 6 節以下のこと、73 番では詩編 20 編 4 節の引用、103 番では使徒言行録 10 章 15 節のこと、最後 162 番では福音 (書) における聖句が該当する。以上により結論 1) については変更、修正の必要はないものと思われる。

つづいて 2) についてだが、動詞と結びくのが主語である場合なので主格ということになる。すると 36 番、60 番となるが、これは先の論文で考察した箇所となるので、あらためて論ずる必要はない。

では「神の声」でなくとも、 $\phi\omega\nu\eta$  (以下「フォーネー」と記す) が主語となって動詞と結びつく場合は、その動詞の働きはどのような性格のものとなるのだろうか。しかし複数主格の 3 例、単数主格の 35 例について確認してみたが、ここで論ずるべきものは見いだせなかった。ひとつは、雅歌の言葉として引用、言及される「声」が何であるのかを述べるものが多いことが

ある。しばしば「……である」と述べられている。14番の「この声は率直に嘆きである」(59.13)は、雅歌1章6節の「自分の畑は見張りもできなかった」についての解釈となる。こうした聖書の言葉の解釈、意味について述べるものは他にもいくらか見いだせるが、たとえば26番の「『畑』によって主の声はこの世を意味させている(σημαίνει)」という。また122番の「こうした声は苦痛を示している」(ἐνδείκνυται)などでは、アレゴリカル解釈が展開されており、ここで「声」ということが何かの働きをなしているとは考えられない。したがって第二について何か新しい知見を加えるものは何もないが、変更の必要はないと言える。

ところで日本語で「声」というとき、この言葉には何か人格的な言葉というニュアンスが強くなる。たとえば「声なき者の声」というフレーズに感じられるように、きわめて強く人格的、個人的なニュアンスを帯びている。これに対して「フォーネー」には「音」の意味も含まれている。たとえば9番と93番のテキストではそれぞれ「ラッパのフォーネー」と「豎琴のフォーネー」が出てくるが、擬人化されているわけではない。それらは「音」の意であって人格的な「声」というのではない。

それでもやはりフォーネーが第一に意味するのは人間や生き物の声であろう。この意味については、Liddle & Scott & Jonesをはじめ確認したいずれの希英辞典においても、その最初に記されていることから理解される<sup>(7)</sup>。

人間の声という点でフォーネーには「言語」の意味もある。ギリシア語、ヘブライ語それぞれを表現するフォーネーの用例は、12番、41番、132番から136番(133番を除く)が該当する。なお人の話す言葉のことであるから「声」ということが含意されているとしても、何か個人的で人格的な声の現象を指すのではなく、一般言語のことなのであろう。また「言語」という意味で必ずフォーネーが用いられているわけではなく、フォーネーも「言語」を意味する言葉のひとつということになる。これとの関連では「音声」という意味で用いられる用例が挙げられる。たとえば79番のテキストでは「神は人びとの本性に人間の声を設置したが、それは、心の動きを声に分節化し、言語の器官となるために他ならない」という。あるいは146番では「声は言葉

の道具であり、それは喉から生じる」とも述べられ、こうした音声としてのフォーネーの意味も確認される。

とは言え、以上の「音」や「言語」「音声」の意味で用いられる場合に聖書と無関係にフォーネーが使われているわけではない。「ラッパ」は出エジプト記に登場し、「豎琴」はアモス書の一節にある。またギリシア語であれヘブライ語であれ、聖書の言語、その翻訳の問題が論じられており、聖書と無関係に用いられているのではない。また「音声」が話題となる時、それはパウロの声であり、また説教者の声のことを意味しているのであって、これらの場合にも聖書との関係が確認される。

フォーネーが聖書と関連することについて、その典型的な事例は前置詞の「カタ」(κατά) を用いた表現に認めることができる。対格支配の前置詞であるが、以下そのバリエーションを列挙していこう。「カタ」は便宜上一律に「に従えば」と訳しておく。「主の声に従えば」(11番、116番)、「主人の声に従えば」(80番)、「使徒(=パウロ)の声に従えば」(13番、144番、145番)、「パウロの声に従えば」(71番、117番、139番、143番、152番、158番)、「ヨハネの声に従えば」(24番、72番、127番)、「預言者の声に従えば」(イザヤ、ダビデ：59番、123番、128番、129番)、「目下の声に従えば」(雅歌の一節：74番)、「福音の声に従えば」(92番)、「箴言の声に従えば」(119番、123番)、「約束なさる方の偽りなき声に従えば」(95番)、以上のバリエーションで23用例が確認される。これらの場合は必ず聖書のどこかの箇所が引用されたり、暗示されたりしている。

こうしたフォーネーが用いられる場合、単に「言葉」だけでなく、「声」ということで何か意味することがあるのだろうか。「パウロの言葉に従えば」と「パウロの声に従えば」とは同じ意味合いのことなのだろうか。まず指摘できるのはこれらの用例において際立つのは、聖書の言葉のなかでもイエスについて科白を指す場合である。11番のヨハネ福音書5章24節、80番のマタイ福音書5章8節、92番のマルコ福音書3章35節、95番のルカ福音書12章42節から44節、116番のマタイ福音書24章35節、これらはいずれも福音書においてイエス自身が語る言葉である。— なお前置詞「カタ」を用い

た句ではないが、福音書に登場する百人隊長の科白についてフォーネーが使われていた(96番、97番)。それゆえこれらにおいては「声」の意味合いが強く出ていえると言えよう。ではヨハネについて語られる24番、72番、127番のテキストはどうだろうか。これらはすべて第一ヨハネ書簡4章8節を指しており、ヨハネの科白ではなく、書簡の言葉である。それは書かれた文字ではあるが、朗読され、個人としての色合いが強く出ていて、それがフォーネーの表現につながったと推定しても無理はないであろう。同じことはパウロ、イザヤ、ダビデ、雅歌で箴言でさえも該当し、そうした言葉がその人びとの「声」として捉えられていたと考えられる。またこれが書かれた文字でなく、生ける声であるとするならば、その声はまさに聖書朗読の声と重なる可能性も推定される。次節で論ずるが、神が伝道者の実際の「声」を用いて語るとするテキストがいくつか確認できるからである。

また『雅歌講話』であることから当然ではあるが、雅歌の記されている言葉についてフォーネーが使われている例が多くみられる。煩瑣であるためテキスト番号は挙げないが、何らかの雅歌の言葉を指す箇所総数は63箇所となる。中でも雅歌2章8節の「私の恋人の声がする」、また5章2節の「私の恋人の声が扉を叩いている」はそれぞれ第五講話と第十一講話において繰り返し言及される。2章8節にしても5章2節にしても直接「声」と述べているものの、これを単純にアレゴリカルに解釈しているのではなく、むしろその声性が積極的に捉えられているといえる。その他、詩編、預言書の言葉を指してフォーネーとするテキストも見出せる。これらはそれぞれの著者の声という意味合いとともに、ここでも聖書朗読における声も含意されているものと思われる。

『雅歌講話』におけるフォーネー用例はすべて聖書と関連付けられているのだろうか。ここで注意しなければならないことは、聖書との関連性も様々であって、一様ではないことである。もっとも単純なものは、フォーネーが直接聖句を指す場合であって、たとえば先に確認したように「使徒の声に従えば」とあるとこれはパウロ書簡の一節・一句を指しており、これについてフォーネーと言われている。また雅歌の一節を直接指す場合もあった。しか

し具体的な箇所は明示されず、聖書全般、雅歌全体、福音書の記事についてフォーネーが用いられる場合もある（2番、3番、5番、10番、57番）。あるいは9番のように「雅歌」という言葉の意味を説明する場合もある。さらに一見すると聖書との関連のない用例として76番、77番、79番、149番が挙げられる。音声、喉における発音機構としてのフォーネーは確かに直接には喉から発せられる音声のことを議論するものであるが、それでも間接的に聖書との関連性が確認される。たとえば76番から79番の文脈は、雅歌4章4節に見られる「首」（喉）という表現に関するものであり、それが伝道者のことであり、この声、喉をとおして霊を受け、音声によってロゴスに仕えるという。したがって間接的、あるいは排除しないという意味で消極的ではあるが、これらのフォーネーを聖書と関連するものと捉えることもできる。また直接雅歌の一節ではなく、グレゴリオスの創作となるが、雅歌の花嫁の言葉として記される120番、153番、154番のフォーネーは聖書との関連性が想定されていると捉えてよいだろう。また1番ではアレゴリカル解釈の命名の問題として聖書の解釈についてであり、「言語」の意味の12番では聖書の翻訳、また132番等の場合でも聖書に記されている「ケファズ」というヘブライ語の翻訳の問題となっている。また84番、85番で創造の力（デュナミス）を神の声に帰しているが、ここでは創世記1章3節から24節が問題となっていた。

以上より、本稿の結論の一つとして次のテーゼを挙げておきたい。

ニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』では、直接的、間接的、積極的、消極的を含めてその仕方は多様ではあるが、フォーネーはすべて聖書と関連付けて用いられている。フォーネーという言葉についてすべてを聖書との関連で用いることからして、グレゴリオスが「声」について神学的思想をもっていたと言えるのではないだろうか。では、それはどのような神学的思想なのだろうか。次節ではこれに関して考えてみたい。



## 2. 『雅歌講話』における「声」の思想さまざま

前節においてフォーネーの用法について聖書との関連を指摘したが、続いてグレゴリオスの「声」の神学的思想について、テキストをもとに以下四点を順次論じていく。

### a. 預言者の声と御言葉の受肉

第五講話は雅歌 2 章 8 節にある「私の恋人の声がする」(φωνὴ τοῦ ἀδελφίδου μου) から始まっている。冒頭これまでの花嫁である魂の歩みが総括されるが、それは「*超越的な諸善の観想への渴望*」とそこに向けた一定の歩みとなる。そしてその歩みがすでに頂上に到達したかに見えるとしても、ここで「私の恋人の声がする」と言われるという。「*というのもこれらすべての登頂を真理の明瞭な観想とも把握でなく、聴覚を通して諸々特徴によって印象付ける、恋人の声と名付けるのであり、声とは考察を通して知られ喜びを与えるものではないからである*」<sup>(8)</sup>。ここで「声」と語られることで雅歌を通した魂の歩みがまだ頂上には遠いことが暴露される。そもそも際限のない歩みこそがこの『雅歌講話』の論述全体を貫く基調だと言えるのであり、その後もいたるところでこの主題は繰り返し登場することになる。

しかしグレゴリオスはここで一つの連関に着目する。それは「私の恋人の声がする」に続いて「見よ、あの方が来る」と言われることである。ここからグレゴリオスは、「声」を預言者にあてはめ、「あの方が来る」を御言葉の受肉と捉える。「*実に預言者たちを通して花婿の声が生起し、この人びとのなかで神が語られた。そしてこの声の後、御言葉が敵対する山々を飛び越え、丘を飛び越してやって来た*」<sup>(9)</sup>。なおここで語られる「山」や「丘」は敵対する勢力のことであるとの説明が続いている。預言者は「声」として特徴づけられ、イエス・キリストは受肉によってその姿を現したというのである。旧約と新約の対比が、声、聴覚と視覚によって表現される。この場合、声は不完全さを表すと同時に、志向性を意味する。見てしまうことは何か完成の意

味合いがあるのに対して、聴くことはさらに先のを志向させる、この志向性が声（を聴くこと）の特徴となる。

同じ第五講話のなかに、もうひとつ同様の意味での「声」に言及するテキストがある。そこでは預言者ではなく、洗礼者ヨハネが「声」として表現されている（49番、50番）。雅歌2章12節の「キジバトの声」をヨハネと捉えるわけである。キジバトは春を告げる鳥だと説明されており、洗礼者ヨハネはキリストの到来を告げる声だという。これも同様にイエス・キリストを志向するものとして捉えられている。

#### b. 伝道者の声

第一講話のなかに「その方はこのソロモンを道具として用い、その声を通してまず箴言においてわれわれに語り、次にコヘレトの言葉、これらの後で雅歌のなかに置かれている哲学において道を整え順番に、完全性への登り道を理性に対して示すのである」<sup>(10)</sup> という一文が認められる（6番）。冒頭の「その方」とはイエス・キリストのことであり、ここではキリストがソロモンの声を道具として用いるという。その結果、箴言、コヘレトの言葉、そして雅歌ができ上がった。執筆の次第はともかくも、キリストがソロモンの声を用いるという点が興味深い。「逐語靈感説」といえば神が人間の手を用いて執筆せしめるという自動機械のようなイメージをもってしまいが、ここでは神は手を用いるのではなく、人の声を用いるという。

神が人の声を用いるという考え方は、この他幾度か論じられている。まずは第七講話のなかで雅歌3章4節に見られる「首」について説明している文脈で、テキスト番号76番から79番が挙げられる。もう一つは第十四講話に認められるもので146番から149番までを含む文脈となっている。

第七講話のなか231頁5行あたりから雅歌4章4節の「首 [喉]」（*τράχηλος*）という言葉に着目して解釈が展開していく。その中で、一般的に万物の頭であるものは「首」と呼ばれるとしたうえで、本来的にはキリストが「首」（＝頭）であるとされつつ、次のように述べる行がある。

これらに加えてわれわれの心を燃え立たせ熱くする霊を受け取り、また響きのよい声を通して御言葉(ロゴス)に仕えるならば[[首・喉]と名付けられるであろう]。というのも言語のこの器官が心の動きを分節化するためにこそ、神は人間の音声を人間の本性に建て付けたからである。<sup>(11)</sup>

心の動きを分節化することが具体的に声の役割であるので、「首 [喉]」と呼ばれる存在は中心にあってその声を通して分節化された言葉を発する。はじめは一般的にしか述べられないが、そのすぐ後でパウロについて次のように記されている。「かくして何を語ろうとも語っているのはもはやパウロではなく、その頭である方が話しているのである」<sup>(12)</sup>。キリストが語ることに於いてパウロはその声を提供していることになる。逆を言えば、パウロという伝道者の声は、彼の中で語っているキリストを伝える道具となっていることになる。

さらにもう一つ関連するテキストを考察しておきたい。それは第十四講話の中であって、雅歌5章16節の「その喉は甘美」(φάρυγξ αὐτοῦ γλυκασμός)の註釈をおこなっている行である。

「よき言葉は蜜の滴るハチの巣」(箴言16章24節)であり、声は、その発生が喉から生じる言葉の道具であるので、おそらくこの名称(=声)によって、そのなかでキリストが語られる、御言葉へ奉仕し解釈する者たちのことが意味されていると考えても過ちではない。というのも偉大なるヨハネは、何者かと問われると、自らを声と名乗ったが、それは御言葉に先んずる人であったからである。また至福なるパウロも、自らの中でキリストが語っていることの証しを与えたのだが、彼はキリストに自らの声を供与したのであり、キリストを通して語る彼は甘美であった。そしてすべての預言者は、自分たちの声の器官を彼らの中で響き渡る御霊に譲り渡し、甘美となった。そして神的な蜜を自分の喉を通して撒いたのであった。王もその民も健康のためこれを飲み、それを享受することで願望が満足して削がれることはなく、むしろ望んだものに与ることですますその望みを養うのである。<sup>(13)</sup>

ここでグレゴリオスは洗礼者ヨハネ、パウロ、すべての預言者たちについて、この人びとが「声」であったという。そして「声」であるこの人びとは「御言葉へ奉仕し解釈する者たち」(τούς ὑπηρετάς τε καὶ ὑποφήτας τοῦ λόγου)と述べられる。旧約、新約に登場する人びとについてこのように「声」と述べられるが、ではグレゴリオスの同時代人、伝道者、説教者、聖書朗読者について該当するのだろうか。ここでナジアンゾスのグレゴリオスがその父グレゴリオスについて述べた「神の声を授ける者」という一句を想起したい。礼拝における説教者を指す可能性は否めなく、関連付けて読むことができるように思われる<sup>(14)</sup>。いずれであれ、ここでは伝道者自身の身体から発せられる「声」がキリストの語りとして捉えられている。伝道者は語り、預言するが、その声の本当の主体はキリスト、神、聖霊であるということになる。

### c. 声とデュナミス

いくらかのテキストでは、フォーネーをデュナミス、すなわち力と結び付けて解釈するところがある。これを述べるものは、まず27番のテキストとなるが、そこでは雅歌2章7節にある「野の力」(ταῖς δυνάμεσιν τοῦ ἀγροῦ)について述べた箇所となる。これを解釈していく中で、「力」が複数形であることからグレゴリオスはこれは天使のことを述べたものと捉える。ここでは「力」という声(=言葉)の意味するものは何かが問題となっている。

これに対して107番のテキストでは声というものの力について述べる。雅歌5章2節の「恋人の声が扉を叩いています」を問題として、これをグレゴリオスは、花嫁たる魂は神の顕現を受け入れようとするが、戸口に立つ御言葉を中に入れて同居させることなく、ただ「その声の力強さに驚嘆させられている」(ἐν θαύματι τῆς φωνῆς ποιῆται τὴν δύναμιν)状態にあるという。ここからグレゴリオスは独自のエペクタシス論を展開する<sup>(15)</sup>。次の言葉はそのすぐ後に述べられている。

神に向かって登り行く者たちにとってその行程はいかに際限のないもので

あるのか、またいかに常に把握されたものがいっそう高次のものへのはじまりとなることか、が理解される。<sup>(16)</sup>

この短い一文はグレゴリオスのエペクタシス論を簡潔に表現している。見えてしまうことで止まってしまうのではなく、声を聴くことでその力に引き寄せられて際限なく進んでいく、雅歌5章2節についてこのように解釈するのである。

神のフォーネーの力については、また第八講話にある84番と85番においても確認できる。

御言葉の声は力の声であり、ちょうど最初の創造のときに光はその命令によって輝き出し、さらにその命令の言葉によって大地が据えられ、他のすべての被造物もこのように創造する言葉によって同時に出現したのであるから、同様の仕方で、今やまた御言葉は魂がよりよきものとなって自分のところに来るように励ますことで、魂はその命令によって力づけられそのようになるのである。それは花婿が望んでいたことであり、こうして魂はいっそう神的なものへと変化して、そうしたよき変容を通してかつてそうであった栄光からいっそう高い栄光へと変容せしめられるのである。<sup>(17)</sup>

ここでは創世記冒頭に記されている、神の声が世界を創造したことを引き合いに出して、同じくその神の声が魂を変容せしめるという。神の声の力強さを述べるのであるが、第二コリント書3章18節にある「栄光から栄光へ変容せしめられる」の聖句をグレゴリオスはエペクタシス的に解釈するのである。このよりよきものへの際限のない前進こそ、ここで神の声の力（デュナミス）だとされる<sup>(18)</sup>。

もう一つこのデュナミスに関わるテキストがあり、それが第五講話のなかにある、44番から46番にあたる一連のテキストである。マタイ福音書にみられる中風を患う人の話（9章5節）から「立って歩け」というイエスの声に言及される。語りかけられた人は立ち上がって歩いたという。次のように

グレゴリオスは記す。

御言葉は重い床を持ち上げるだけでなく、歩むように命じているのであって、それはわたしにはよりよきものへの前進、移動運動を通した増大を意味するものと思われる。「立って、来なさい」とおっしゃるのだが、なんと力に満ちた命令であることか。まことに神の声は力に満ちた声であり、ちょうど詩編も「見よ、彼の声、力の声」（詩67編34節）と述べている。<sup>(19)</sup>

ここでも「より良きものへの前進」といったエペクタシス的表現が用いられ、キリストの声は魂をしてこの歩みを歩ませる力をもった命令となっているという。『雅歌講話』におけるフォーネーは力に満ちたものとされるが、その力とは、人をして神へ向かった無限の歩みを歩ませるものなのである。その意味でグレゴリオスのフォーネーの神学は、グレゴリオスのエペクタシス論に極まると言っても過言ではないだろう。

#### d. 声とエペクタシス

デュナミスの概念とは別に、フォーネーが使われる文脈でエペクタシス論が展開する箇所がいくらか確認できる。実は『雅歌講話』という文書は、そもそも完全性への登頂へと聴講者を誘う目的で記されているのであり、そのため全編において何度も繰り返しエペクタシスを基調とした解釈が展開している。そのためフォーネーに関わるテキストでも複数箇所にわたりエペクタシスが主題となっていることが確認される。ここでは三つのテキストを取り上げてみたい。

まず第八講話にあるテキストを確認したい（82番、83番）。雅歌2章10節で「来たれ、私の良き人よ」と述べ、再び13節で「おいで、私の鳩よ、自分でおいで、岩陰のなかに」と続く点を指摘して、次のように言う。

そして他のこうした声を、御言葉は魂に対していっそう偉大なものへの願望を勧め誘うものとなし、そして今や自分のところに登りくる魂にすべての

点で汚れなきものであることを証しして言う。「あなたのすべては美しく、あなたのうちには汚れはない」(雅歌4章7節)。(20)

雅歌に記されている声、また聖書に見られる同様の声は、御言葉が魂を誘う声であるという。これが過去の出来事を述べたものでないことは明らかであろう。そもそも『雅歌講話』という企画自体が、雅歌の言葉の現在性を意識し、現に生きている人の魂の導きとなるよう展開されている点を考慮するならば、むしろ雅歌が朗読され、その声として経験されるように解釈が展開していると言える。ところが魂はここまで到達すると「慢心に満ちて」(ἐγχαυνωθείσα)、さらなる前進を止めてしまうかもしれない。そこでさらに続けて「再び励ましの声を通して」(διὰ τῆς προτρεπτοκῆς ταύτης φωνῆς)命じられるという。すなわち「レバノンより出てきなさい、花嫁よ」(雅歌4章8節)。以下この言葉を同様に絶えざる前進・上昇を誘う言葉として解釈していくのである。

次に取り上げるべきは、第六講話のなかで比較的はじまりに近いところに位置し、第五講話までの考察のまとめを簡潔に行う(61番、62番)。その過程で魂の完全性に言及しつつ、次のように述べている。

かくも高められた魂が完全性の極みに到達したと誰が語らないだろうか。しかし同様に、達成された頂点もさらなる上への導きの端緒なのである。これらすべては声の響きと見なされ、聴覚を通して神秘的なものへの観想へと魂を転向させるのである。(21)

こうして新しい、異なった視野で神が探求されていく、なぜなら神について「現れたものは一つの視覚のもとにはなく、また同じ場所にも存立しているのではなかった」(οὐχ ἕστηκεν οὔτε ἐπὶ τῆς μιᾶς ὀψεως οὔτε ἐπὶ τοῦ τόπου τοῦ αὐτοῦ τὸ φαινόμενον)からである。そして「自分のもとに届いた二度目の声によって花嫁は、再びいっそう大きな境地にいたる」のであり、さらに見神(ἰδεῖν τὸν θεόν)の境地にいたってもそれははじまりにすぎず、

「さらに再び声を聴く」(πάλιν τῆς φωνῆς ἀκούει) ののである。こうして繰り返し返し声を聴くことで、際限のない前進が神に向かって、自らの完全に向かってなされていくのである。

最後に取り上げるのは、先にデュナミスのところでも考察したが(107番)、第十一講話に確認されるテキストである(106番から113番)。この講話では雅歌5章2節の「恋人の声が扉を叩いています」の解釈からはじまっている。先にデュナミスのところでも引用した一文の続きは次のようになっている。

というのも魂に向かって語られたことを通して、われわれは至高のところへの歩みの前進の何かしら停止を期待したのだが(完全であることの証言の後でさらに大きな何を求めるというのだろうか)、その時にわれわれは魂がまだ家の中にいて、扉の外には出ておらず、顔を合わせての顕現を喜んでい  
るのではなく、聴覚を通して善なるものに与ることへと導かれているのを見出すのである。<sup>(22)</sup>

視覚による停止に対して聴覚による前進が対比して論じられる。魂による神に向かった歩みは都度どれほど完成したように見えようと次の段階へのはじまりにすぎず、さらにその歩みは続いていく。このテキストでは続いて有名な「尽きざる泉」の比喩が論じられ、さらにその後には暗闇の中に入ったモーセの記事が取り上げられ、いま論じた趣旨に添って解釈されていく。ここではその詳細は割愛するが、この文脈の行きつくところに「現存の感覚」のテキストが登場するのである。

というのも見えざるものがどのようにして夜に現れるのであろうか。そうではなく、魂に何か現存の感覚を与えるのであり、本性の不可視に隠されて明瞭な把握を逃れるのである。<sup>(23)</sup>

この有名なテキストにおいて「現存の感覚」といわれるその「感覚」(αἴσθησις)とは、これまでの議論から聴覚のことと理解しても間違いではな



いだろう。魂は聖書に記されているその声に導かれてエペクタシスの道を歩むのであるが、その前進には止まることがなく、聖書の声に導かれて際限なく進んでいくしかない。なぜなら神は無限なる方であるからであって、そこに善性の際限のない豊かさがあるとグレゴリオスは考えているのである。

## 結論

これまでの考察を通して得られた結論を以下にまとめておきたい。

- 1) まず『雅歌講話』におけるフォーネーは、仕方は多様であるが、そのすべての用例において聖書との関連の中で用いられている。
- 2) フォーネーについてグレゴリオスが『雅歌講話』で展開する神学的思想のひとつは、旧約の預言者の活動を「声」と捉えて、キリストの受肉による顕現との対比を語っていることであった。
- 3) さらに伝道者のフォーネーは、神、キリスト、聖霊が用いる声になっている。すなわち声自体は人の喉から出るものではあるが、その主体は神として捉えられている。さらにこの場合の伝道者とは、預言者、洗礼者ヨハネ、パウロが挙げられているが、それぞれの聖書朗読、また説教者も含まれる可能性は排除できない。
- 4) さらにグレゴリオスによると、フォーネーには力があり、それは創造の力であると同時に、魂を神の無限の探求、すなわちエペクタシスへ誘う力であった。
- 5) 最後にグレゴリオスのエペクタシス論の一側面にはフォーネーの神学が認められる。神は視覚対象として現れるよりも、聴覚によって認められ際限なく、またより善きものへと魂を誘うのである。それゆえフォーネーはエペクタシス論の重要なファクターとして捉えられているのである。

声には志向性があり、われわれは声に導かれる。聖書の言葉は声として経験され、その声を聴くことでわれわれは神のリアリティを経験しつつ、神へと、より善き生へと導かれていく。聖書の言葉が声として経験されるとすれば、それは聖書を声に出して読むときであり、また聖書朗読の時であろう。

書かれた文字としての聖書テキストではなく、いま語りだされる力強い神の声としてその現在性がとらえられる。ここからグレゴリオスはそのエペクタシス論を展開させる。以上エペクタシス論の一側面として、グレゴリオスの「声の神学」ともいうべき思想が確認されるのである。

## 註

- (1) テキストは Brill 社刊の Gregorii Nysseni Opera 所収の第 6 巻を用いる。H. Langerbeck ed., *Gregorii Nysseni In Canticum Canticorum*, 1960. また邦訳として下記があり、適宜参照した。大森正樹・宮本久雄・谷隆一郎・篠崎榮・秋山学訳『ニュッサのグレゴリオス 雅歌講話』新世社、1991 年。なお引用に際しては、邦語、欧文の双方においてイタリック体を用い、また欧文文献の書名についてもイタリック体を用いる。
- (2) 「ニュッサのグレゴリオスにおける「神の声」の用例と用法」、『神學研究』第 68 号、2021 年、29–39 頁。なお『雅歌講話』における「声」(音) に注目した先行研究は見出していない。たとえば G. Maspero, M. Brugarolas, I. Vigorelli eds., *Gregory of Nyssa: In Canticum Canticorum. Analytical and Supporting Studies. Proceedings of the 13<sup>th</sup> International Colloquium on Gregory of Nyssa (Rome, 17-20 September 2014)*, Leiden; Brill, 2018 にもとくに見出せない。
- (3) 研究ノート「ナジアンゾスのグレゴリオスにおける  $\theta\epsilon\iota\alpha\ \phi\omega\nu\eta$  の用法と用例」、『神學研究』第 69 号、2022 年、119–126 頁。左記研究ノートは原稿の締め切りの都合からナジアンゾスのグレゴリオスに限定したものとなったが、続けてバシレイオスについても同様の研究を行い、2022 年 3 月 17 日開催 (オンライン) の日本基督教学会近畿支部会で「カッパドキア教父における「神の声」( $\theta\epsilon\iota\alpha\ \phi\omega\nu\eta$ ) の用例と用法」と題して口頭発表した。なおこの口頭発表では題にもかかわらずバシレイオスとナジアンゾスのグレゴリオスについてとなっている。そして同年 7 月 16 日京都大学基督教学会においてニュッサのグレゴリオスを加えて「ニュッサのグレゴリオスにおける「神の声」の思想」と題してカッパドキア三教父における「神の声」の用例と用法の全体について口頭発表を行っている。本稿の研究は、研究を「神の声」に限定せず広く、しかし対象著作を『雅歌講話』に限定してニュッサのグレゴリオスについて研究したものとなる。なおこの研究は、その表とともに、日本基督教学会近畿支部会において「ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における声の思想」と題して口頭発表を行った (2023 年 3 月 23 日、関西学院大学)。
- (4) *Thesaurus Linguae Graecae. A Digital Library of Greek Literature*, University of

California, Irvine. <http://stephanus.tlg.uci.edu/>.

- (5) 『雅歌講話』のテキストを示す場合は、グレゴリオス著作集 (GNO) 第六巻の頁数と行数を示す。
- (6) 前回の検索方法は、*θεια + φωνη* について、*proximity, case sensitive, within 10 words* を条件として行った。今回は語根のみを入れて、*φων* のみでの検索となる。この検索条件の違いが結果の相違をもたらしたと推定されるが、詳細はまだ不明にとどまる。
- (7) 件の辞典には次のようにある。*sound, tone, prop. the sound of the voice, whether of men or animals with lungs and throat. 続けてその第一に上がっている意味は、mostly of human beings, speech, voice, utterance.* となる。
- (8) *πάσας γὰρ τὰς ἀναβάσεις ἐκείνας οὐ θεωρίαν τε καὶ κατάληψιν ἐναργῆ τῆς ἀληθείας ἀλλὰ φωνὴν τοῦ ποθουμένου κατονομάζει διὰ τῆς ἀκοῆς χαρακτηριζομένην τοῖς ἰδιώμασιν, οὐ διὰ τῆς κατανοήσεως γινωσκομένην τε καὶ εὐφραίνουσιν.* (138, 9-13)
- (9) *γέγονέ τε οὖν ἡ τοῦ νυμφίου φωνὴ διὰ τῶν προφητῶν, ἐν οἷς ἐλάλησεν ὁ θεός, καὶ μετὰ τὴν φωνὴν ἦλθεν ὁ λόγος ἐπιειδῶν τοῖς ἀντικειμένοις ὄρεσι καὶ τῶν βουνῶν καθαλλόμενος, ……* (142, 9-12)
- (10) *οὗτος ὄργανῳ τῷ Σολομῶντι τούτῳ χρησάμενος διὰ τῆς ἐκείνου φωνῆς ἡμῖν διαλέγεται πρότερον μὲν ἐν Παροιμίαις, εἶτα ἐν τῷ Ἐκκλησιαστῇ καὶ μετὰ ταῦτα ἐν τῇ προκειμένη τοῦ Ἄιματος τῶν Ἄισμάτων φιλισοφία ὁδῶ καὶ τάξει τὴν πρὸς τὸ τέλειον ἄνοδον ὑποδεικνύων τῷ λόγῳ.* (17, 7-12)
- (11) *πρὸς τούτοις εἰ τοῦ πνεύματός ἐστι δεκτικός τοῦ τὴν καρδίαν ἡμῶν πυροειδῆ ποιούντος καὶ ἐκθερμαίνοντος καὶ εἰ διὰ τῆς εὐήχον φωνῆς ὑπηρετεῖ τῷ λόγῳ. οὐδὲ γὰρ ἄλλου τινὸς ἕνεκεν τὴν ἀνθρωπίνην φωνὴν ὁ θεὸς τῇ φύσει τῶν ἀνθρώπων ἐνετεκτίνατο ἢ ἵνα ὄργανον ἦ τοῦ λόγου διαρθροῦσα δι' ἑαυτῆς τὰ τῆς καρδίας κινήματα.* (234, 21-235, 5)
- (12) *ὥστε καὶ ὅσα ἐλάλει μηκέτι αὐτὸν εἶναι τὸν λαλοῦντα, ἀλλὰ τὴν κεφαλὴν αὐτοῦ φθέγγεσθαι, ……* (235, 17-19)
- (13) *ἐπεὶ οὖν κηρία μέλιτος οἱ καλοὶ εἰσι λόγοι, λόγου δὲ ὄργανόν ἐστὶν ἡ φωνή, ἥς ἡ γένεσις ἐστὶν ἐκ φάρυγγος, τάχα τοὺς ὑπηρέτας τε καὶ ὑποφήτας τοῦ λόγου ἐν οἷς λαλεῖ ὁ Χριστὸς τῷ ὀνόματι τούτῳ σημαίνεσθαι νοῶν τις οὐχ ἀμαρτῆσεται. καὶ γὰρ ὁ μέγας Ἰωάννης ἐρωτηθεὶς ὅστις εἶη φωνὴν ἑαυτὸν κατωνόμασεν, ἐπειδὴ τοῦ λόγου πρόδρομος ἦν, καὶ ὁ μακάριος Παῦλος δοκιμὴν ἐδίδου τοῦ ἐν αὐτῷ λαλοῦντος Χριστοῦ, ὃ τὴν φωνὴν ἑαυτοῦ χρήσας γλυκασμὸς ἦν δι' ἐκείνου φθεγγόμενος, καὶ πάντες οἱ προφήται τὰ φωνετικά ἑαυτῶν ὄργανα τῷ ἐνηχοῦντι αὐτοῖς πνεύματι παραχωρήσαντες γλυκασμὸς ἐγίνοντο τὸ θεῖον μέλι διὰ τοῦ λάρυγγος τοῦ ἰδίου πηγαζόντες, ὃ Βασιλεῖς τε καὶ ἰδίωται πρὸς ὑγείαν προσφέρονται, οὐ ἢ ἀπόλαυσις*

οὐκ ἐπικόπτει τὴν ἐπιθυμίαν τῶ κώρα, ἀλλὰ τρέφει μᾶλλον διὰ τῆς τῶν ἐπιθυμουμένων μετουσίας τὸν πόθον. (425, 2-17)

- (14) 拙著「ナジアンゾスのグレゴリオスにおける神の声の用例と用法」を参照。とくに以下の議論はここに引用しておきたい。ここで参照したい用例は、Funeris in laudem Caesaris fratris oratio (oratio 7, ch. 3, section 1, line 6)に見られるもので、θείαν φωνήνと記されている。これはグレゴリオスの弟カエサリウスの追悼説教となっているもので、369年春のものであってそこに含まれている。「冒頭兩親について述べるが、第三章は父グレゴリオスについて述べる段落となる。グレゴリオスは、父について「第二のモーセ、アロンとして神に近づくことにおさわしく、神の声を遠方にとどまる者たちに授ける者」と言う。父グレゴリオスはナジアンゾスの主教として地域の教会を指導してきた人物であったが、「神の声を授ける」(θείαν φωνήν χορηγεῖν)というのはどのような意味であったのか。モーセやアロンに言及されるが、それは神の啓示を受け取るためモーセとアロンが山に登ったと記す、出エジプト記24章2節、9節を指しているのであろう。父グレゴリオスが信徒に向けて神の声を取り次いでいることを言う。「授ける」(χορηγεῖν)とは、ランペの事典では「神について」(of God)使われる言葉であって、神が何かを授けるという意味で使われる。従って父グレゴリオスを通して神が声(御言葉)を人びとに授けるという意味合いが込められているであろう。とは言え「神の声を授ける」の具体的な意味が不明にとどまる。読師の行う聖書朗読というよりも、説教のことと思われるが、説教を「神の声」としているのかどうかは慎重な検討を要する。」(122頁)
- (15) エペクタシス論については、次の拙著を参照。『神認識とエペクタシス — ニュッサのグレゴリオスによるキリスト教的神認識論の形成』創文社、1998年。
- (16) Ὁρᾶς, πῶς ἀόριστος ἐστὶ τοῖς πρὸς τὸν θεὸν ἀνιούσιν ὁ δρόμος, πῶς τὸ αἰὲ καταλαμβάνομενον ἀρχὴ πρὸς τὸ ὑπερκεῖμενον γίνεται. (320, 8-10)
- (17) Ἀλλ' ἐπειδὴ πάντοτε ἡ τοῦ λόγου φωνὴ δυνάμεώς ἐστι φωνή, καθάπερ ἐπὶ τῆς πρώτης κτίσεως συνεξέλαμψε τὸ φῶς τῶ προστάγματι καὶ συνυπέστη πάλιν τῶ προστακτικῶ ῥήματι τὸ στερέωμα καὶ ἡ λοιπὴ πᾶσα κτίσις ὡσαύτως τῶ ποιητικῶ συνανεφαίνετο λόγῳ, τὸν αὐτὸν τρόπον καὶ νῦν τοῦ λόγου τὴν ψυχὴν κρείττονα γενομένην πρὸς ἑαυτὸν ἐλθεῖν ἐγκελευσάμενου ἀδιαστάτως δυναμωθεῖσα τῶ προστάγματι τοιαύτη γίνεται, οἷαν ὁ νυμφίος ἐβούλετο, μεταποιηθεῖσα πρὸς τὸ θεϊότερον καὶ ἀπὸ τῆς ἐν ἧ ἦν πρὸς τὴν ἀνωτέραν δόξαν μεταμορφωθεῖσα διὰ τῆς ἀγαθῆς ἀλλοιώσεως, …… (253, 8-18)
- (18) M. Harl, 《From Glory to Glory》 L'interpretation de II Cor. 3, 18 b par Gregoire de Nysse et la liturgie baptismale, in: KYRIAKON Festschrift Johannes Quasten, Muenster Westf.: Verlag Aschendorf, 1970, p. 730-735.
- (19) οὐ γὰρ διανίστησι μόνον ὁ λόγος τὸ ἐπικλίνιον ἄχθος ἐκεῖνο, ἀλλὰ καὶ περιπατεῖν

ἐγκελεύεται, ὅπερ μοι δοκεῖ τὴν πρὸς τὸ κρεῖττον πρόοδον τε καὶ ἐπαύξησιν διὰ τῆς μεταβατικῆς κινήσεως σημαίνειν. Ἀνάστα οὖν φησι καὶ Ἐλθέ. ὡς προστάγματος δύναμις. ὄντως φωνὴ δυνάμεώς ἐστιν ἢ φωνὴ τοῦ θεοῦ, καθὼς ἢ ψαλμωδία φησὶν ὅτι ἴδου δώσει τὴν φωνὴν αὐτοῦ, φωνὴν δυνάμεως. (149, 7-14)

- (20) καὶ ἄλλας τοιαύτας φωνὰς προτροπικὰς τε καὶ ἐλκτικὰς τῆς τῶν μειζόνων ἐπιθυμίας ὁ λόγος πρὸς τὴν ψυχὴν ποιησάμενος καὶ μαρτυρήσας ἤδη τῇ πρὸς αὐτὸν ἀνιούσῃ τὸ διὰ πάντων ἀμώμητον εἰπὼν ὅτι “Ὀλη καλὴ εἶ καὶ μῶμος οὐκ ἔστιν ἐν σοί, …… (249, 2-7)
- (21) τίς οὖν οὐκ ἂν εἴποι τὴν ἐπὶ τοσοῦτον ὑψωθεῖσαν ψυχὴν ἐν τῷ ἀκροτάτῳ γεγενησθαι ὄρω τῆς τελειότητος; ἀλλ’ ὅμως τὸ πέρς τῶν προδιηνυσμένων ἀρχὴ γίνεται τῆς ἐπὶ τὰ ὑπερκείμενα χειραγωγίας· πάντα γὰρ ἐκεῖνα φωνῆς ἤχος ἐνομίσθη πρὸς τὴν τῶν μυστικῶν θεωρίαν τὴν ψυχὴν διὰ τῆς ἀκοῆς ἐπιστρεφούσης, …… (177, 17-178, 3)
- (22) ὅτε γὰρ στάσιν τινὰ τοῦ δρόμου τῆς ἐπὶ τὰ ὑψηλὰ πορείας διὰ τῶν πρὸς αὐτὴν εἰρημένων ἠλπίσαμεν (τί γὰρ ἂν τις μετὰ τὴν τῆς τελειότητος μαρτυρίαν πλέον ζητήσῃεν;) τότε βλέπομεν ἔτι ἔνδον οὔσαν αὐτὴν καὶ οὐπω τῶν θυρῶν ἐκτὸς γεγενημένην οὐδὲ τῆς κατὰ πρόσωπον ἐμφανείας κατατρυφήσασαν …… (320, 10-16)
- (23) πῶς γὰρ ἂν ἐν νυκτὶ φανείῃ τὸ μὴ ὁρώμενον; ἀλλ’ αἴσθησιν μὲν τινα δίδωσι τῇ ψυχῇ τῆς παρουσίας, ἐκφεύγει δὲ τὴν ἐναργῆ κατανοήσιν τῷ ἀοράτῳ τῆς φύσεως ἐγκρυπτόμενος. (324, 9-12)

ニュッサのグレゴリオス『雅歌講話』における φωνή の用例と意味 (GNO 頁順)

| 番号 | 語形    | φωνή を含むギリシア語  | φωνή を含む句の訳        |
|----|-------|--|--------------------|
| 1  | φωνήν | ἀλλάσσειν τὴν φωνήν                                    | 声を入れ替える            |
| 2  | φωνῶν | ἐκ τῶν εὐαγγελικῶν φωνῶν                               | 福音の声 (pl.) から      |
| 3  | φωνάς | τοῦ χρῆναι διερευνᾶν τὰς θείας φωνάς                   | 神の声 (pl.) を探求する必要へ |
| 4  | φωνῆς | παρὰ τῆς τοῦ δεσπότου φωνῆς                            | 主の声によれば            |
| 5  | φωνάς | τὰς ἀκηράτους τοῦ νυμφίου τε καὶ τῆς<br>νύφης φωνάς    | 花婿と花嫁の淨い声          |
| 6  | φωνῆς | διὰ τῆς ἐκείνου φωνῆς                                  | その声を通して            |
| 7  | φωνῆς | οἱ τῆς φωνῆς τοῦ νυμφίου ἀκούσαντες                    | 花婿の声を聴く者たち         |
| 8  | φωνήν | τὴν φωνήν τῆς σάλπιγγος ταύτης<br>μέγα τι καὶ ἑξαίσιον | あのラッパの大きく過度の音      |
| 9  | φωνῆς | διὰ τῆς ὑπερθετικῆς ταύτης φωνῆς                       | この優れた声を通して         |
| 10 | φωνάς | τὰς θείας τοῦ ὄσματος τῶν ἀσμάτων<br>φωνάς             | 『雅歌』の神的な声          |
| 11 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ κυρίου φωνήν                              | 主の声に従えば            |
| 12 | φωνήν | εἰς τὴν Ἑλλάδα φωνήν                                   | ギリシア人の声へ           |
| 13 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ ἀποστόλου φωνήν                           | 使徒の声に従えば           |
| 14 | φωνή  | ἡ φωνή   | 「この声はまさに嘆きである。」    |

| 意味・引用箇所<br>*旧約はLXX | 講話 | GNO<br>頁.行 | 備考  | 補足   |
|--------------------|----|------------|---|------|
| アレゴリカル解釈のこと        | 0  | 5.19       | 「しかし彼(=パウロ)は歴史[的出来事]を両契約の撰理(経綸)を示すものへと移そうとして、声(表現)を差し替えます。」<br>*ガラテヤ4章24節ではἀλληγορούμενα、また第一コリント10章11節では「予型として」(τυπικῶς)、第一コリント13章12節「鏡」(ἐσόπτρον)、「謎」(αἶνιγμα)などと言い換えていること。 |      |
| 福音書の記事             | 0  | 9.07       | 文字通りの意味と霊的意味とが異なる例を福音書に求めるなら、無数に存在すること。   | 福音   |
| 聖書の言葉のこと           | 0  | 10.01      | 聖書解釈論   | θ.φ. |
| マタイ15章11節(イエスの科白)  | 0  | 10.09      | 「口から入るもので人を汚すものはない。」  | 主    |
| 雅歌の言葉のこと           | 1  | 15.07      | 第一講話のはじまり。少し前で「この雅歌の神秘に聴き入りなさい」という。雅歌の章句を情念にみちた解釈をしないようにという。  |      |
| ソロモンの声             | 1  | 17.08      | 「このソロモンを道具として用い、その声を通してまず箴言においてわれわれに語り、次にコヘレトの言葉でそうし、これらの中で雅歌において……」 *ソロモンの声、しかしキリストがその声を用いる。   |      |
| ヨハネ3章29節の引用(部分)    | 1  | 24.19      | 洗礼者ヨハネの言葉の引用。花婿=キリスト  |      |
| 出エジプト19章16節。       | 1  | 26.07      | ここのφωνήは「声」でなく、「音」という意味。  | 音    |
| 「歌の歌」という概念・表現      | 1  | 26.14      |   |      |
| 雅歌の言葉(全般)のこと       | 1  | 27.19      |   | θ.φ. |
| ヨハネ5章24節のこと        | 1  | 32.11      | カタ句   | 主    |
| ギリシア語のこと           | 2  | 53.18      | 言語のことをφωνήという。  | 言語   |
| ローマ1章30節のこと        | 2  | 55.10      | カタ句   | 使徒   |
| 雅歌1章6節のこと          | 2  | 59.13      | 「自分の畑は見張りもできなかった。」という節。   |      |

|    |       |                                |                 |
|----|-------|--------------------------------|-----------------|
| 15 | φωνῆς | τῆς σῆς φωνῆς                  | あなたの声（を聴く）      |
| 16 | φωνῆς | διὰ τῆς φωνῆς σου              | あなたの声によって       |
| 17 | φωνῆς | τῆς τοῦ νυμφίου φωνῆς          | 花婿の声（に値しない）     |
| 18 | φωνῆς | ἐκ τῆς τοῦ εὐαγγελίου φωνῆς    | 福音の声から          |
| 19 | φωνῆς | ἀκούση τῆς γλυκείας φωνῆς      | 甘い声を聴きなさい       |
| 20 | φωνή  | αὐτοῦ τοῦ νυμφίου φωνή         | 花婿自身の声          |
| 21 | φωνῆς | διὰ τῆς ἰδίας φωνῆς            | 自らの声を通して        |
| 22 | φωνῆς | διὰ τῆς τοιαύτης φωνῆς         | そのような声を通して      |
| 23 | φωνῆ  | ταύτη πρὸς τοὺς φίλους τῆ φωνῆ | その友人たちに向けた声を用いて |
| 24 | φωνήν | κατὰ τὴν Ἰωάννου φωνήν         | ヨハネの声に従えば       |
| 25 | φωνῆς | διὰ ταύτης τῆς φωνῆς           | こうした声を通して       |
| 26 | φωνή  | ἡ τοῦ δεσπότου φωνή            | 主の声             |



|                                    |   |        |   |     |
|------------------------------------|---|--------|---|-----|
| 牧者（花婿）の声（花嫁の願い・祈りの言葉として想定して記されている） | 2 | 61.12  | 「栄養ある牧草へと私を導き、あなたの羊である私が、あなたの声を聴くことができるよう名前で私を呼んでください。そしてあなたの声で永遠の生命を私に与えてください。」                                    |     |
| 牧者（花婿）の声                           | 2 | 61.12  | 同上  |     |
| 花婿（キリスト）の声                         | 2 | 63.05  | 第二講話は雅歌1章5節から8節までが扱われ、花婿の言葉はまだ語られておらず、この段階で花婿の言葉が語られないことについて述べられる。「しかし神は彼女についてよりよきものを予め見ておられるので、彼女はまだ花婿の声には値していない。」 |     |
| マタイ 25 章 31-46 のこと（山羊）             | 2 | 66.04  | あなたは福音の声によってまったくその言葉（=山羊）のことを理解している。  | 福音  |
| マタイ 25 章 34（科白）                    | 2 | 69.16  |   |     |
| 雅歌 1 章 9 節以下                       | 3 | 70.22  | 「花婿自身の声が円い太陽のように昇り、その輝く光線によって星の輝きや夜明けの光は覆い隠されてしまう。」 * 浄め、洗う力をもつ花婿の声   |     |
| 雅歌 1 章 9 節以下の花婿の言葉                 | 3 | 71.07  | 神の言葉そのものは自らの声を通して聴く者に清浄な力との交わりを与えてくれるので、その言葉は神性そのものに与っている。  |     |
| 雅歌 1 章 10 節のこと                     | 3 | 80.03  | 「そのような声を通して形の小さい点で似たものがわれわれに示されている。」 * 「首飾りのように」（雅歌 1 章 10 節）ということについて「声」と言われている。                                   |     |
| 雅歌 1 章 12 節のこと                     | 3 | 88.17  | その友人たちに向けた声を用いて『私のナルドの香を放っている』（雅歌 1 章 12 節）と述べている。  |     |
| 第一ヨハネ 4 章 8 節                      | 4 | 120.18 | 「神は愛なり」。花嫁の花婿への愛、エペクタシス論が前に論じられ、神への愛とその秩序が語られる。   | ヨハネ |
| 雅歌 2 章 4 節「私の上に愛を秩序付けてください」        | 4 | 121.07 | 「こうした声を通して何か一層高次のものの教えを私たちは学ぶのです。」  |     |
| マタイ 13 章 38 節の「野」という言葉             | 4 | 132.11 | 主の声が「野」によって世を意味させていることは、福音書から万人に明らかである。   | 主   |

|    |       |                              |                  |
|----|-------|------------------------------|------------------|
| 27 | φωνῆς | διὰ ταύτης τῆς φωνῆς         | こうした声を通して        |
| 28 | φωνή  | Φωνή τοῦ ἀδελφιδοῦ μου       | 私の恋人の声           |
| 29 | φωνή  | φωνή τοῦ τρυγόνος            | キジバトの声           |
| 30 | φωνήν | ἀκούτισόν με τήν φωνήν σου   | あなたの声を私に聴かせてください |
| 31 | φωνή  | ἡ φωνή σου                   | あなたの声            |
| 32 | φωνήν | φωνήν τοῦ ποθουμένου         | 恋人の声             |
| 33 | φωνή  | Φωνή τοῦ ἀδελφιδοῦ μου       | 私の恋人の声           |
| 34 | φωνή  | Φωνή στοχασμόν               | 推測させる声           |
| 35 | φωνή  | φωνή τοῦ ἀδελφιδοῦ μου       | 私の恋人の声           |
| 36 | φωνή  | ἡ θεία φωνή                  | 神的な声             |
| 37 | φωνή  | Φωνή τοῦ ἀδελφιδοῦ μου       | 私の恋人の声           |
| 38 | φωνῆς | αὕτη ἡ τῆς φωνῆς ἀκοή        | 声を聴くこと           |
| 39 | φωνή  | ἡ τοῦ νυμφίου φωνή           | 花婿の声             |
| 40 | φωνήν | μετά τήν φωνήν ἦλθεν ὁ λόγος | その声の後に御言葉がやってきた  |

|                 |   |        |   |                           |
|-----------------|---|--------|---|---------------------------|
| δύναμις という言葉   | 4 | 133.08 | 雅歌2章7節の「野の力」について。「力が単数で語られるとき、その思想はこの声を通して神的なものに結びついている。」雅歌2章7節の「野の力」について続いて「力」が考察される。単数=神の力、複数=天使の諸力。  | 力                         |
| 雅歌2章8節の引用       | 5 | 135.16 | 「私の恋人の声がする」 *この聖句がひとつの主題となって論じられる。 *第五講話冒頭の引用   |                           |
| 雅歌2章12節の引用      | 5 | 136.10 | *第五講話冒頭の引用  |                           |
| 雅歌2章14節の引用      | 5 | 136.17 | *第五講話冒頭の引用  |                           |
| 雅歌2章14節の引用      | 5 | 136.18 | *第五講話冒頭の引用  |                           |
| 雅歌2章8節のこと       | 5 | 138.11 | 聴覚についての考察。「魂はそのすべての登攀を真理の明瞭な観想や把握でなく、また認識を通して知られ享受されるのでもなく、聴覚をとおして様々な特徴によって性格づけられた「恋人の声」と名付けている。」 *個々の文脈全体では、声は一般に聴く者を導くのであるから、完成した状態を表さないことが論じられる。 | no.33-41=<br>137.4-145.13 |
| 雅歌2章8節の引用       | 5 | 139.01 | 恋人(花婿)のありのままを見せる/見るのではないこと。   |                           |
| 雅歌2章8節の解釈       | 5 | 139.02 |   |                           |
| 雅歌2章8節の引用       | 5 | 140.07 | 直ちに ἰδοὺ οὗτος ἦκει と続く。預言者の声→御言葉の受肉  |                           |
| 雅歌2章8節のこと       | 5 | 140.13 | 「『私の恋人の声がする』と言って直ちに『あの方が来る』と続ける。」「来る」とは受肉であり、この ἔργον によってこの声(雅歌2章8節)が証される。   | θ.φ.                      |
| 雅歌2章8節の引用       | 5 | 140.15 |   |                           |
| 新約との対比で旧約の特徴として | 5 | 140.19 | 「神は昔から預言者たちにおいて様々な仕方で先祖たちに語られた」、これは声を聴くことである。これに対して新約は受肉のため「見る」ことが特徴である。  |                           |
| 預言者の言葉          | 5 | 142.09 | 「まことに花婿の声は預言者たちを通して生じた。彼らの中で神は語り、そしてその声の後でロゴスが敵対する山を踏み越え、丘を飛び越えて来られた。」  |                           |
| 預言者の言葉          | 5 | 142.10 | 預言者の声→御言葉(ロゴス)の受肉   |                           |

|    |       |  |                       |
|----|-------|--|-----------------------|
| 41 | φωνῆς | οἱ τῆς Ἑβραίων φωνῆς ἐπιστήμονες                                       | ヘブライ人の声（ヘブライ語）を知る人たち  |
| 42 | φωνή  | φωνή τοῦ τρυγόνος  | キジバトの声                |
| 43 | φωνῆς | τῆς ἡδείας τῶν τρυγόνων φωνῆς  | 鳩の甘い声                 |
| 44 | φωνή  | ὄντως φωνή δυνάμεως ἐστὶν ἡ φωνή τοῦ θεοῦ                              | 実に神の声は力の声なのである。       |
| 45 | φωνή  | 同上   | 同上                    |
| 46 | φωνήν | τὴν φωνήν αὐτοῦ, φωνήν δυνάμεως  | 見よ、[神は] 御声を、力の上を上げる   |
| 47 | φωνήν | 同上   | 同上                    |
| 48 | φωνή  | ἡ σιωπῶσα τῶν ᾠδικῶν ὀρνίθων φωνή                                      | 歌う鳥の沈黙の声              |
| 49 | φωνή  | ἡ φωνή τοῦ τρυγόνος, τουτέστιν ἡ φωνή τοῦ βοῶντος ἐν τῇ ἐρήμῳ          | 「キジバトの声」、即ち荒野に叫ぶ者の声   |
| 50 | φωνή  | 同上   | 同上                    |
| 51 | φωνή  | φωνή τοῦ τρυγόνος  | キジバトの声                |
| 52 | φωνῆς | ἐκ τῆς τοῦ κυρίου φωνῆς  | 主の声から                 |
| 53 | φωνή  | ἡ φωνή σου   | あなたの声                 |
| 54 | φωνήν | τὴν φωνήν σου  | あなたの声                 |
| 55 | φωνήν | τὴν φωνήν σου  | あなたの声                 |
| 56 | φωνή  | ἡ διὰ τῶν θυρίδων φωνή   | 窓を通して聞こえる声            |
| 57 | φωνάς | τὰς θείας φωνάς τὰς ἐπαγγελλομένας τοῖς ἀξίοις τὴν αἰωνίαν μακαριότητα | ふさわしい人々に永遠の至福を約束する神の声 |

|                                   |   |        |   |                          |
|-----------------------------------|---|--------|---|--------------------------|
| ヘブライ語のこと                          | 5 | 143.16 |   | 言語                       |
| 雅歌 2 章 12 節の引用                    | 5 | 146.01 |   |                          |
| 雅歌 2 章 12 節のこと                    | 5 | 146.14 | 春の描写  |                          |
| マタイ 9 章 5 節の「立って来たれ」という主の声のこと(科白) | 5 | 149.12 | 主の声には力がある。 *エペクタシスへと導く力   | 力                        |
| 同上                                | 5 | 149.12 | 同上  |                          |
| 詩編 67 編 34 節の引用                   | 5 | 149.13 | 現行の詩編 68 編 34 節   | 力                        |
| 同上                                | 5 | 149.14 | 同上  |                          |
| 冬の比喩のひとつ                          | 5 | 152.12 | 雅歌 2 章 11 節の「冬」について、その悪しき状態を指す。ただしこの表現は雅歌には見られない。                         |                          |
| 雅歌 2 章 12 節の引用                    | 5 | 154.07 | キジバトの声 = 洗礼者ヨハネの声 *ヨハネは徳の美しい花々を人びとに示したという。                                |                          |
| マルコ 1 章 3 節                       | 5 | 154.07 | 同上  |                          |
| 雅歌 2 章 12 節                       | 5 | 154.14 | キジバト = 春を告知する鳥  |                          |
| マタイ 13 章 39 節 (科白)                | 5 | 155.22 | 「刈り入れは世の終わりのことである。」 *毒麦の譬え  | 主                        |
| 雅歌 2 章 14 節の引用                    | 5 | 163.15 | というのも次のように述べている。「私にあなたの御顔を示し、あなたの声を聞かせてください。あなたの声は甘く、御顔は輝いているのですから。」と。    | no.53-59 = 163.11-164.15 |
| 雅歌 2 章 14 節の引用                    | 5 | 163.15 | というのも次のように述べている。「私にあなたの御顔を示し、あなたの声を聞かせてください。あなたの声は甘く、御顔は輝いているのですから。」と。    |                          |
| 雅歌 2 章 14 節のこと                    | 5 | 163.21 | 「私の耳に『あなたの声』が響くようにしてください。」 文脈としては旧約における諸時代、預言者の時代の「声」と新約における御顔 (=受肉) との対比 |                          |
| 雅歌 2 章 9 節の「窓から中をうかがい」に対応         | 5 | 164.01 | 「窓を通して聞こえる声がこれほどに甘美であるならば、あなたが御顔を現すことはどれほど愛らしいことでしょうか！」                   |                          |
| 福音のこと、イエスの宣教の言葉 (声)               | 5 | 164.08 |   | θ.φ.                     |

|    |        |                                     |                |
|----|--------|-------------------------------------|----------------|
| 58 | φωναί  | αί τοῦ Σιμεῶνος φωναί               | シメオンの声         |
| 59 | φωνήν  | τὴν φωνὴν αὐτοῦ τὴν ἡδέϊαν          | 彼 (= 花婿) の甘美な声 |
| 60 | φωνή   | ἡ θεία φωνή                         | 神の声            |
| 61 | φωνῆς  | φωνῆς ἤχος                          | 声の響き           |
| 62 | φωνῆς  | φωνῆς δευτέρας                      | 第二の声           |
| 63 | φωναίς | ἐν ταῖς τῶν μουσικῶν ὀρνίθων φωναίς | 音楽のような鳥の声      |
| 64 | φωνῆς  | τῆς φωνῆς                           | 声              |
| 65 | φωναίς | τὰς θείας φωναίς                    | 神的な声           |
| 66 | φωνῆς  | τῆς τῶν φίλων τοῦ νυμφίου φωνῆς     | 花婿の友人たちの声を聴く   |
| 67 | φωνή   | ἡ φωνή                              | [花婿の友人たちの] 声   |
| 68 | φωνῆς  | ἐκ τῆς τοῦ κυρίου φωνῆς             | 主の声から          |
| 69 | φωνήν  | κατὰ τὴν τοῦ προφήτου φωνήν         | 預言者の声に従って      |
| 70 | φωνῆς  | ἀφ' ἑκατέρας φωνῆς                  | いずれの声も         |
| 71 | φωνήν  | κατὰ τὴν Παύλου φωνήν               | パウロの声に従って      |

|                               |   |        |  |                               |
|-------------------------------|---|--------|--|-------------------------------|
| ルカ 2 章 29 節以下の<br>こと (科白)     | 5 | 164.10 |  | シメオン                          |
| 雅歌 2 章 15 節 (?)               | 5 | 164.13 | 「彼の甘美な声を受け入れる人びとは、『あなたは永遠の命を有している』(ヨハネ 6 章 68 節)と述べて、福音の恵みを認めるのです。」  |                               |
| 雅歌 2 章 17 節のこと                | 5 | 169.12 | それは光に満ち溢れた日、「吹きわたった」(雅歌 2 章 17 節) 日である。ちょうど神の声が霊の光に満ちたものと、「吹きわたったもの」と名付けたように。  | θ.φ.                          |
| おそらく雅歌 2 章 8 節<br>のこと         | 6 | 178.01 | 「というのもこれらすべては『声の響き』と呼ばれ、それは聴くことを通して魂を神秘的な事柄の観想へと向けなおすのである。」 *「これらすべて」とは魂の上昇過程(段階)の出来事、つまりエペクタシスを意味する。「前に達成された完成の極みが一層高いものへの導きのはじまりとなる」という。 | no.61-64=<br>177.14-<br>180.7 |
| 雅歌 2 章 10 節以下                 | 6 | 178.09 |  |                               |
| 雅歌 2 章 12 節のキジ<br>鳩の声         | 6 | 178.16 | 第 6 講話の冒頭、第 5 講話で扱った 2 章 12 節が再度取り上げられる。   |                               |
| 雅歌 2 章 15 節で花婿<br>が語ったこと      | 6 | 179.02 | 「再び声を聴くからである。」   |                               |
| 雅歌 3 章 1 節 - 4 節の<br>引用 (が続く) | 6 | 183.17 |  | θ.φ.                          |
| 雅歌 3 章 6 節以下の<br>こと           | 6 | 185.06 |  |                               |
| 雅歌 3 章 6 節のこと                 | 6 | 187.12 | 「荒れ野から上ってくる女人は一体誰だろう」について  |                               |
| ルカ 11 章 7 節のこと<br>(イエスの科白も)   | 6 | 198.03 | 雅歌 3 章 7 節の「床」について、イエスの言葉が引用される。「床とは、救われた者たちの安息であることを主の声を通してわれわれは学んだ。」   | 主                             |
| 詩編 20 編 4 節の引用<br>(ダビデ)       | 7 | 212.12 | カタ句。現行詩編の 21 編 4 節   | 預言者                           |
| 「父」、「母」という言<br>葉              | 7 | 213.01 | いずれの声(言葉:「母」、「父」という言葉)も一つの意味を取り上げている。神には性差がないので、「父」、「母」いずれと言ってもよいということ。  |                               |
| コロサイ 1 章 13 節                 | 7 | 213.17 | カタ句。「愛する御子」のこと   | パウロ                           |

|    |          |  |  |
|----|----------|--|--|
| 72 | φωνήν    | κατὰ τὴν Ἰωάννου φωνήν   | ヨハネの声に従って                              |
| 73 | φωνάς    | τὰς θείας φωνάς  | 神的な声                                   |
| 74 | φωνήν    | κατὰ τὴν προκειμένην φωνήν   | 目下の声に従って                               |
| 75 | φωνή     | φωνή μία   | 一つの声                                   |
| 76 | φωνῆς    | τὸ τῆς φωνῆς ἐργαστήριον   | 音声の機能                                  |
| 77 | φωνητικά | τὰ φωνητικά  | 声の器官                                   |
| 78 | φωνῆς    | διὰ τῆς εὐήχου φωνῆς   | よい響きのする声を通して                           |
| 79 | φωνήν    | τὴν ἀνθρωπίνην φωνήν   | 人間の声                                   |
| 80 | φωνήν    | κατὰ τὴν ἀψευδῆ τοῦ δεσπότου φωνήν   | 主の偽りなき声に従って                            |
| 81 | φωνῆς    | διὰ τῆς φωνῆς ταύτης   | こうした声を通して                              |
| 82 | φωνάς    | ἄλλας τοιαύτας φωνάς προτρεπτικὰς<br>τε καὶ ἐλκτικὰς τῆς τῶν μειζόνων<br>ἐπιθυμίας | [ロゴスは魂に対する] より大きなものへの欲求の励ましと勧めの声 (pl.) |
| 83 | φωνῆς    | διὰ τῆς προτρεπτικῆς ταύτης φωνῆς  | こうした励ましの声を通して                          |
| 84 | φωνή     | ἐπειδὴ πάντοτε ἡ τοῦ λόγου φωνὴ<br>δυνάμεώς ἐστι φωνή                              | ところでみ言葉の声はまったく力<br>の声であるから……           |



|   |   |        |   |      |
|---|---|--------|---|------|
| 第一ヨハネ 4 章 8 節                             | 7 | 214.10 | カタ句。「神は愛である」のこと   | ヨハネ  |
| 詩編 20 編 4 節のこと                            | 7 | 214.15 | 雅歌 3 章 11 節に対応する。*この文脈は「神」について「母」と述べられている雅歌の言葉の説明をしている。名称というものは、キリストを魂に住まわせるよう導く一つの力を表すものなのでこだわる必要はないということ。 | θ.φ. |
| 雅歌 4 章 1 節のこと                             | 7 | 221.03 | カタ句。「あなたの髪はガラアドから現れ出た山羊の群のようだ。」   |      |
| 雅歌 4 章 3 節                                | 7 | 228.14 | 「その時には、すべての教会が善なる方の交響において一つの唇、一つの声となる。」   |      |
| 身体における機能                                  | 7 | 234.08 | 「首」(雅歌 4 章 3 節) について論じられている。*文脈全体では「首」についてキリストのことと解される。またパウロの声を通して語るのはキリストであるからということが論じられる。                 | 音声   |
|   | 7 | 234.09 | 音声、声の出る身体的器官  | 音声   |
| パウロの言葉のこと                                 | 7 | 235.01 | 「よい響きのする声を通して御言葉 (ロゴス) に仕えるならば」= 宣教のこと。首、頭について論じており、パウロが「首」だとされている。   |      |
|   | 7 | 235.03 | 「神は人びとの本性に人間の声を設置したのだが、それは、心の動きを声が分節化し、言語の器官となるために他ならない。」   | 音声   |
| マタイ 5 章 8 節のこと (イエスの科白)                   | 8 | 246.06 | カタ句。「主の偽りなき声に従えば、常に能力に比例して思惟によって受容することが可能だと、『こころの清い者は神を見る。』」  |      |
| 詩編 144 編 5 節のこと                           | 8 | 246.16 | 「主よ、あなたは永遠に至高なる方」 * 第八講話冒頭にあたり、エペクタシス論が展開する文脈 (245.11-247.18)。  |      |
| λόγος = 聖書のこと、ただし直前では雅歌 2 章 10 節、13 節の引用。 | 8 | 249.03 | 雅歌の言葉がエペクタシスへの励ましであることを一般化して、そもそも聖書とは何かということ。   |      |
| 雅歌 4 章 8 節のこと                             | 8 | 249.09 | 次のような励ましの声を通して再び超越的なものごとへの欲動へと上昇するように勧められて言う。「さあ、レバノンより来たれ、花嫁よ」(4, 8) と。                                    |      |
| 神のロゴスの声                                   | 8 | 253.08 | 命令 = 創造の力として (創世 1 章 3 節から 24 節) *エペクタシスを生み出す力となる。  | 力    |

|    |        |   |                    |
|----|--------|---|--------------------|
| 85 | φωνή   | 同上  | 同上                 |
| 86 | φωνήν  | ταύτην φωνήν  | 次のような声             |
| 87 | φωνάς  | τάς θεοπνεύστους φωνάς                                  | 靈感づけられた声           |
| 88 | φωναίς | ταίς ὁμοίαις φωναίς                                     | 花婿は「同様の声」で教会を受け入れる |
| 89 | φωναίς | ἐν ταίς πρώταις φωναίς                                  | 冒頭の声において           |
| 90 | φωνῆς  | ἐκ τῆς μεγάλης τοῦ προφήτου φωνῆς                       | 預言者（ダビデ）の大きな声から    |
| 91 | φωνῆς  | διὰ τῆς τοιαύτης φωνῆς                                  | このような声を通して         |
| 92 | φωνήν  | κατά τὴν τοῦ εὐαγγελίου φωνήν                           | 福音の声に従って           |
| 93 | φωνήν  | πρὸς τὴν φωνήν τῶν ὀργάνων                              | 豎琴の音に合わせて          |
| 94 | φωνήν  | τὴν πρὸς τὸν πατριάρχην γεγομένην παρὰ τοῦ κυρίου φωνήν | 主によって父祖に向けて語られた声   |
| 95 | φωνήν  | κατά τὴν ἀψευδῆ τοῦ ἐπαγγειλαμένου φωνήν                | 約束なさる方の偽りなき声に従って   |
| 96 | φωνήν  | τὴν τοῦ ἑκατοντάρχου φωνήν                              | 百人隊長の声             |
| 97 | φωνή   | ἡ τοῦ ἑκατοντάρχου φωνή                                 | 百人隊長の声             |
| 98 | φωνή   | ἡ τῆς βασιλίδος φωνή                                    | 女王の声               |

|                             |    |        |  |     |
|-----------------------------|----|--------|--|-----|
| 同上                          | 8  | 253.09 | 同上   |     |
| 雅歌 4 章 9 節のこと               | 8  | 253.20 | 「花婿のまわりの天使たちの合唱に驚きが生じ、皆がその花嫁を見て称賛しつつ次のような声を上げる。『汝、われわれの姉妹なる花嫁よ、汝はわれわれの心を生き生きとさせた』と。」                                   |     |
| 聖書に見られる「花嫁」、「妹」といった言葉 (pl.) | 9  | 263.08 | II Cor. 11, 2 (花嫁) ; Cant. 4, 10 (花嫁) ; Mk. 3, 35 (妹)。   |     |
| 雅歌 4 章 10 節のこと              | 9  | 264.06 | 1 章 2 節との関連も。  |     |
| 雅歌冒頭の諸節のこと                  | 9  | 264.08 |  |     |
| 詩編 49 編 9 節、13 節            | 9  | 267.15 |  | 預言者 |
| 雅歌 4 章 11 節のこと              | 9  | 271.03 | 「あなたの衣の香りは乳香の香りのようだ。」  |     |
| マルコ 3 章 35 節のこと (科白)        | 9  | 279.14 | カタ句。「神のみ心をおこなう人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」 *花嫁と花婿への親近性。  | 福音  |
| アモス 6 章 5 節の引用              | 9  | 291.02 | 「豎琴の音に合わせて歌い騒ぐ人々」 * 6 章 4 節から引用がはじまる。  | 音   |
| 創世 15 章 5 節                 | 10 | 296.03 | アブラハムに向けて語られた神の言葉 = 主の声。「というのも、魂の目をもって見上げなさいと聴講者であるあなたに向かって、主によって父祖に向けて語られた声を述べよう。」なおアブラハムの言葉は「天を見上げてこれらの星々を見つめなさい……。」 |     |
| ルカ 12 章 42 節から 44 節         | 10 | 296.09 | カタ句。賢い管理人が主人の全財産を受け継ぐということ。  |     |
| マタイ 8 章 8 節のこと              | 10 | 297.01 | 「福音記者は次のように語り記している。「イエスはこれを聞いて驚き、その百人隊長の声はイスラエルの信仰を超えている」とした。」   |     |
| マタイ 8 章 10 節のこと             | 10 | 297.15 | イエスは百人隊長の声 (= 言葉) を聞いて感心したという。グレはイスラエル (= ヤコブ) との比較を通してこのことを、去ったものを再び呼び戻すものでなく、別のものが来るという思想 = エペクタシス                   |     |
| 雅歌 4 章 16 節の花嫁の言葉           | 10 | 301.08 | 「北風よ、目覚めよ。南風よ、来たれ」   |     |



|                       |    |        |  |             |
|-----------------------|----|--------|--|-------------|
| 雅歌 4 章 15 節のこと        | 10 | 302.02 | 「花婿の声によって彼女はその母となったのだから。」  |             |
| 雅歌 4 章 16 節のこと        | 10 | 303.05 | 「花婿は『私の恋人よ、自分の園に下り、その果物の実を食べてください』と言う。なんと率直さに満ちた声だろう。」   |             |
| 雅歌 5 章 1 節とのつながり      | 10 | 308.08 | εὐαγγέλιον=福音 *文脈全体では、脱自(エクスタシス)が問題となり、これを「より神的に成る」(πρὸς τὰ θεϊότερα) ことと捉える。                                  |             |
| 詩編 115 編 2 節のこと       | 10 | 309.07 | 「偉大なダビデも……不可視の美を見て次のような歌声を叫んだ。『すべての人間は嘘つきである』と」。ダビデの声として。  |             |
| 使徒 10 章 15 節のこと       | 10 | 310.13 | 「神が浄めたものは不浄ではない」との神の声が一度語られただけでなく、三度その告知がなされた。   | θ.φ.        |
| 使徒 10 章 10 節のペトロの聴いた声 | 10 | 310.15 | 「第一の声で父なる神が浄めることをわれわれが知るために」   |             |
| 雅歌 5 章 2 節の引用         | 11 | 314.12 | 講話冒頭の引用  |             |
| 雅歌 5 章 2 節の引用         | 11 | 319.08 | 引用をしたのち、「どのようにして、述べられたこと(λεγομένων)を通して一層神的なものへと登る花嫁の登攀をふさわしい仕方理解するのだろうか。」と続く。<br>*文脈全体は、かなり本格的なエペクタシス論となっている。 | 319.5-323.9 |
| 雅歌 5 章 2 節のこと         | 11 | 320.04 | 「いま戸口の前に立つロゴスを未だ中に入れて家に住まわせていないので、その声の力強さに驚嘆しているのである。」   | 力           |
| 雅歌 5 章 2 節の引用         | 11 | 320.06 | エペクタシス論の文脈   |             |
| 雅歌 5 章 2 節のこと         | 11 | 320.06 | このため花婿の声は彼女自身でなく、彼女の扉を捉えていると言う。「私の恋人の声が扉を叩いている」と。エペクタシス的前段階に続いて。   |             |
| 第一コリント 8 章 2 節        | 11 | 320.19 | 「自分が何か知っていると思う人がいたら、その人は知らねばならない通りにはまだ知らないのです。」  | 使徒          |
| 雅歌 5 章 2 節 (おそらく)     | 11 | 321.05 | 「花婿は一度も見られていないので、姿を見せるであろうとその声を通して花嫁に約束するのである。」  |             |

|     |       |  |                      |
|-----|-------|--|----------------------|
| 112 | φωνῆ  | Φωνὴ τοῦ ἀδελφιδοῦ μου κρούει ἐπὶ τὴν θύραν                        | 私の恋人の聲が扉を叩いています      |
| 113 | φωνῆς | τοῦ διὰ τῆς φωνῆς προσηχῆσαντος λόγου                              | 聲を通してこだまする言葉（を聞く）    |
| 114 | φωνῆς | οὐκέτι φωνῆς τὴν καρδίαν θυροκρουστούσης                           | もはや聲が扉を叩くのではなく       |
| 115 | φωνῆς | αὐτοῦ τῆς φωνῆς  | 彼の聲                  |
| 116 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ κυρίου φωνήν  | 主の聲に従って              |
| 117 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ Παύλου φωνήν  | パウロの聲に従って            |
| 118 | φωνήν | τὴν τοῦ δεσπότου φωνήν   | 主の聲                  |
| 119 | φωνήν | κατὰ τὴν παροιμιώδη φωνήν  | 箴言の聲に従って             |
| 120 | φωνάς | φωνάς ἐνδεικτικὰς τῆς ἀφράστου μακαριότητος                        | 言い難い至福を示す声 (pl.)     |
| 121 | φωναί | αἱ φωναί   | 声 (pl.)              |
| 122 | φωνή  | ἡ φωνὴ τοῦ Ἐπαταξάν με καὶ Ἐτραυματίσαν με                         | 「私を打った」、「私を傷つけた」という声 |
| 123 | φωνήν | κατὰ τε τὴν παροιμιώδη διδασκαλίαν καὶ κατὰ τὴν τοῦ προφήτου φωνήν | 箴言の教えに従い、また預言者の聲に従って |

|                                      |    |        |   |     |
|--------------------------------------|----|--------|---|-----|
| 雅歌 5 章 2 節の引用                        | 11 | 322.02 | エペクタシス論の文脈(尽きざる泉の比喩)  |     |
| 声 = 5 章 2 節の冒頭、言葉 (ロゴス) = 同箇所<br>の続き | 11 | 322.05 | まず「恋人の声が扉を叩いています」との声が聞こえ、さらにこだまして「開けておくれ、愛しい姉妹よ。愛しい近しい人よ……」(5 章 2 節)  |     |
| 雅歌 5 章 2 節を指しつつ、否定する。                | 11 | 332.11 | 「その後魂はふたたび高みへの登攀に着手するが、もはや声が扉を叩くのではなく、神の御手自身が隙間を通して中へと忍び込んでくる。」   |     |
| 雅歌 5 章 2 節のこと                        | 11 | 333.02 | * 文脈は雅歌 5 章 4 節の解釈で、5 章 2 節の段階よりもいっそう高い境地に至っていると評価される。  |     |
| マタイ 24 章 35 節のこと                     | 11 | 336.02 | カタ句。「天地は過ぎゆく」、その時には視覚、聴覚、思考を超えた生命に入る、という。   | 主   |
| ローマ 1 章 20 節の引用                      | 11 | 339.15 | カタ句。「神について知りうる事柄は、創造された世界を通して思惟されることがはっきりと見て取れる。」   | パウロ |
| ヨハネ 12 章 24 節 (科白)                   | 12 | 345.07 | 「このため偉大なパウロもおそらく『先ず種が死によって分解されなければ芽は育たない』と述べた主の声をよく理解していた。」   | 主   |
| 箴言 5 章 3 節以下の引用                      | 12 | 350.16 | カタ句。「蜜が悪徳の唇から滴り、しばらくは喉を潤すが、悪しき意図でその甘未を味わった者どもには、その後それがニガヨモギよりも苦いことが分かる。」  |     |
| 雅歌の花嫁の言葉として想定される言葉                   | 12 | 358.04 | 「声が言い難い至福を示すことができると考えて、できるかぎり、私は叫びました。しかしあの方は [その声が] 意味する者よりもより優れていました。」 神の名辞の問題 = 神は名辞を超えていること。この前のところでエペクタシス論が展開。 |     |
| 雅歌 5 章 7 節                           | 12 | 359.15 | 雅歌の言葉「打った」「傷つけた」「薄衣をはぎ取った」  |     |
| 雅歌 5 章 7 節のこと                        | 12 | 361.11 | こうした声が「苦痛」(ἀλγημα) を示しているという。   |     |
| 預言者 = モーセ、ダビデ                        | 12 | 362.16 | カタ句。箴言 ↔ 預言者 (モーセ; 申命 32 章 39 節、ダビデ; 詩編 22 編 4 節)   |     |

|     |       |  |                       |
|-----|-------|--|-----------------------|
| 124 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ κυρίου φωνήν                  | 主の声に従って               |
| 125 | φωνεῖ | φωνεῖ                                      | [到達できない方を] 呼ぶ。        |
| 126 | φωνῆς | φωνῆς μόνης                                | 声だけ                   |
| 127 | φωνήν | κατὰ τὴν Ἰωάννου φωνήν                     | ヨハネの声に従って             |
| 128 | φωνην | κατα την του προφητου φωνην                | 預言者の声に従って             |
| 129 | φωνήν | κατὰ τὴν τοῦ προφήτου φωνήν                | 預言者の声に従って             |
| 130 | φωνῆ  | τῇ φωνῆ                                    | 「こんにちは恵まれた方」という<br>声で |
| 131 | φωνήν | ταύτην τὴν φωνήν                           | このような声を               |
| 132 | φωνήν | πρὸς τὴν ἡμετέραν φωνήν                    | われわれの声に               |
| 133 | φωνῆς | διὰ τῆς φωνῆς ταύτης                       | この声を通して               |
| 134 | φωνάς | οἱ τὰς φωνὰς τῶν Ἑβραίων<br>ἐξελληνίσαντες | ヘブライ人の声を翻訳した人びと       |
| 135 | φωνήν | μηδεμίαν φωνήν                             | いかなる声も……ない            |



|                              |    |        |  |      |
|------------------------------|----|--------|--|------|
| ルカ 15 章 4 節から 10 節にある「踊り」のこと | 12 | 364.12 | カタ句。「天使たちのすべての踊りが主の声に従って陽気に踊られた。」 *雅歌 5 章 7 節「町をめぐる見張りは私を見つけると」について見張り=天使、私=魂、天使たちが魂を見出したことで踊られる。                          | 主    |
| 唯一の動詞 (雅歌 5 章 6 節)           | 12 | 367.12 | 「花婿に向かって走る花嫁もより偉大なものへの前進の途上で停止を見出さない。彼女は……」。エペクタシスの一コマとして描写。   | 「呼ぶ」 |
| イザヤ 6 章 8 節の「主の声」            | 12 | 368.15 | イザヤの召命記事の一部  |      |
| 第一ヨハネ 4 章 8 節                | 12 | 370.12 | カタ句。「神は愛」  | ヨハネ  |
| 詩編 62 編 12 節                 | 13 | 374.03 | カタ句。「その中で誓うすべての者は称えられるであろう。」   | 預言者  |
| イザヤ 65、17                    | 13 | 385.01 | カタ句。「預言者の声に従えば、そこ (=教会) において新しい天と新しい地が創造される。」  | 預言者  |
| ルカ 1 章 42 節 (科白)             | 13 | 389.11 | 「喜びを通して出産を完遂しなければならなかったので、『こんにちは恵まれた方』と大天使は彼女に声をかけてその苦を取り除いた。その苦とは原初より罪のために出産に際して定められたものであった。」                             |      |
| 雅歌 5 章 10 節                  | 13 | 389.18 | 雅歌 5 章 10 節の花嫁の言葉「私の恋人は色白で赤みを帯びており、幾万人の中から選ばれたお方」を一般人と比べて特別であるという意味で処女降誕と結び付けて、「このような声を花嫁は彼にあてはめた」と述べる。                    |      |
| ギリシア語のこと                     | 13 | 390.12 | 「『その頭はケファズの金』、このヘブライ語 (λεξις) はわれわれの声 (=言語) に移されるなら、清らかで精錬され、一切の混ぜ物とは無縁の金というものをその声によって意味している。」                             | 言語   |
| 雅歌 5 章 11 節の「ケファズの金」         | 13 | 390.14 |  |      |
| 声 = 言語                       | 13 | 390.15 | 「ケファズ」の翻訳問題。比喩でなく、言い方として言語のことを「声」と読んでいる箇所。   | 言語   |
| ギリシア語のこと                     | 13 | 390.17 | 「ヘブライ人の声 (=言語, pl.) を訳した人びとは『ケファズ』という語 (λεξις) を訳さずに残したが、それはギリシア人の言葉 (λήμα) の中にヘブライ語 (φωνή) において見出される意味を表す声を見出さなかったためである。」 | 言語   |

|     |          |                                   |              |
|-----|----------|-----------------------------------|--------------|
| 136 | φωνῆ     | τῆ Ἑβραϊδι φωνῆ                   | ヘブライ人の声で     |
| 137 | φωνῆς    | παρ' αὐτῆς τῆς τοῦ νυμφίου φωνῆς  | この花婿の声から     |
| 138 | φωνῆ     | λαμπρᾶ τῆ φωνῆ                    | 晴朗な声で        |
| 139 | φωνήν    | κατὰ τὴν τοῦ Παύλου φωνήν         | パウロの声に従って    |
| 140 | φωνῆς    | διὰ τῆς τοῦ ἀποστόλου φωνῆς       | 使徒の声から       |
| 141 | φωνῆς    | τὸ ταύτης τῆς φωνῆς σημαίνονμενον | こうした声の意味するもの |
| 142 | φωνῆς    | ἀπὸ τῆς θείας φωνῆς               | 神の声から        |
| 143 | φωνήν    | κατὰ τὴν τοῦ Παύλου φωνήν         | パウロの声に従って    |
| 144 | φωνήν    | κατὰ τὴν τοῦ ἀποστόλου φωνήν      | 使徒の声に従って     |
| 145 | φωνήν    | κατὰ τὴν τοῦ ἀποστόλου φωνήν      | 使徒の声に従って     |
| 146 | φωνή     | ἡ φωνή                            | 声            |
| 147 | φωνήν    | φωνήν ἑαυτὸν κατωνόμασεν          | 自らを「声」と名乗った  |
| 148 | φωνήν    | τὴν φωνήν ἑαυτοῦ                  | 自分の声を        |
| 149 | φωνετικά | τὰ φωνετικά ἑαυτῶν ὄργανα         | 自分たちの声を出す器官  |
| 150 | φωνῆς    | διὰ ταύτης τῆς φωνῆς              | こうした声を通して    |
| 151 | φωνῆ     | τῆ φωνῆ τοῦ Ἰωάννου               | [洗礼者] ヨハネの声  |
| 152 | φωνήν    | κατὰ τὴν τοῦ Παύλου φωνήν         | パウロの声に従って    |

|                                |    |        |   |      |
|--------------------------------|----|--------|---|------|
| ヘブライ語のこと                       | 13 | 390.18 | 言語のことを φωνή という。  | 言語   |
| 雅歌 5 章 2 節                     | 13 | 392.03 | 「『わたしの巻き髪は夜露にまみれています』という花婿の声から……」   |      |
| イザヤ 40、9-12                    | 14 | 400.18 | 預言者イザヤの言葉   |      |
| 第二コリント 5 章 19 節                | 14 | 407.03 | カタ句。「さて『頭』とは肉によるキリストのことと私たちは考えました。パウロの声に従えばそのキリストにおいて、神はこの世とご自身とを和解させたのです。」                       | パウロ  |
| 第一コリント 1 章 9 節<br>ならびに 4 章 2 節 | 14 | 408.15 |   | 使徒   |
| こうした声=タルシス                     | 14 | 410.16 | 「それらの姿はタルシスの姿のごとくであった」(エゼキエル書 1 章 16 節)。ただし現行聖書のエゼキエル書にはこの行は確認されない。                               |      |
| ヨハネ 7 章 38 節 (イエスの科白)          | 14 | 414.08 |   | θ.φ. |
| 第一コリント 3 章 11 節                | 14 | 417.10 | カタ句。「真理とは、パウロの声に従えば神の建物の土台となり、またそう名付けられる。」  | パウロ  |
| 第一テモテ 3 章 15 節                 | 14 | 419.14 | カタ句。「真理の土台」   | 使徒   |
| 第一コリント 15 章 24 節               | 14 | 421.12 | カタ句。最後の敵が滅ぼされる最後の時のこと。  | 使徒   |
| 説教者の「声」                        | 14 | 425.03 | 「声は言葉 (ロゴス) の道具であり、それは喉から生じる」。この一文は一般論だが、全体の文脈が述べるのは、説教者の声=御言葉の道具ということ。                           | 音声   |
| 洗礼者ヨハネのこと                      | 14 | 425.07 | ヨハネ 1 章 23 節。「偉大なヨハネは、何者かと問われると自らを『声』と名乗った。」  |      |
| パウロのこと                         | 14 | 425.09 | 第二コリント 13 章 3 節。「至福なるパウロも、彼の中で語るキリストの確証を得た。つまり彼は自分の声をキリストに貸し与え、パウロを通してキリストが語るのであるから、自ら甘美なる者となった。」 |      |
|                                | 14 | 425.11 |   |      |
| 雅歌 5 章 16 節のこと                 | 14 | 426.01 | 「求められる者の美をこうした声をとおして描いている」  |      |
| ヨハネ 1 章 9 節のこと                 | 15 | 434.08 | アンドレに向けた「見よ、神の子羊だ」という洗礼者ヨハネの言葉  | ヨハネ  |
| 第一コリント 3 章 9 節                 | 15 | 436.19 | 「われわれは神の畑」という句  | パウロ  |

|     |       |   |   |
|-----|-------|---|---|
| 153 | φωνήν | τὴν φωνὴν ταύτην                            | 次のような声を   |
| 154 | φωνάς | ταύτας τὰς φωνάς                            | こうした声=「私は恋人の顔を円の中いっぱいに見ています。ですから彼の姿の美しさはすべて、私の中に見ることができるのです。」 |
| 155 | φωνῆς | παρὰ τῆς τοῦ δεσπότου φωνῆς                 | 主の声を通して   |
| 156 | φωνάς | μετὰ τὰς φωνάς                              | 以上の声の後に   |
| 157 | φωνῆς | τὸ ἡδὺ τῆς φωνῆς τῆς τε παρειᾶς τὸ ἔρυθρημα | 声の甘美さ、頬の赤さ  |
| 158 | φωνήν | κατὰ τὴν Παύλου φωνήν                       | パウロの声に従って   |
| 159 | φωναί | αἱ φωναὶ μαστιγουμένων                      | 鞭うたれる者どもの声  |
| 160 | φωνῆς | τῆς φωνῆς τοῦ κλαυθμοῦ μου                  | わたしの嘆きの声  |
| 161 | φωνῆς | διὰ τῆς τοῦ κυρίου φωνῆς                    | 主の声によって   |
| 162 | φωνάς | τὰς θείας τοῦ εὐαγγελίου φωνάς              | 福音の神的声  |
| 163 | φωνάς | τὰς τοῦ κυρίου φωνάς                        | 主の声   |

MEMO

カタ句 = κατά + acc.

また旧約書について（特に詩編）は LXX の章（編）・節を記載。

網かけ部分は同一文脈にあることを示す。濃度を交互に変更して区別した。

本表にある講話番号の 0 は序論を指す。

|                                  |    |        |   |      |
|----------------------------------|----|--------|---|------|
|                                  | 15 | 440.07 | 「自由意志をもつ魂のある鏡は次のような声を上げる。『わたしは恋人の顔を円のなかいっぱいに見ています。ですから彼の姿の美しさはすべてわたしの中に見ることができるのです』と。」 *この言葉は、しかし雅歌のものではなく、グレゴリオスの創作。 |      |
| 雅歌の一節ではないが、グレが雅歌の花嫁の言葉と想定して述べる言葉 | 15 | 440.11 | 「パウロは次のように述べてこうした声にまさしく倣っている(ローマ6章11節、ガラテヤ2章20節)。」  |      |
| マタイ5章35節                         | 15 | 444.10 | 「大王の都」  | 主    |
| 創世2章2節、詩編54編7節                   | 15 | 450.04 |   |      |
| 雅歌6章7節                           | 15 | 450.09 |   |      |
| 第一コリント11章15節                     | 15 | 451.12 | 雅歌6章5節の解釈。長い髪の毛は女性の誉れであること。   | パウロ  |
| 詩編6編2節以下のこと                      | 15 | 464.07 |   |      |
| 詩編6編9節                           | 15 | 464.20 | 「主はわたしの嘆きの声を聴き届けられた。」   |      |
| ヨハネ17章のこと                        | 15 | 466.13 | 「それは福音書のなかで、主の声によってわれわれに対して一層明らかに説明されている。」  | 主    |
| ヨハネ17章5節、21節、22節、23節、20章22節(科白)  | 15 | 467.03 | εὐαγγέλιον はここでは福音書のことを意味すると考えられる。  | θ.φ. |
| ヨハネ17章22節(科白)                    | 15 | 467.08 |   | 主    |

θ.φ. = θεία φωνή (神の声)

\*「備考」には適宜メモを記した。

\*本研究では φωνή にのみ着目するが、他には εὐφωνος (235.21:「よき声」) とか、μεγαλοφωνία τοῦ Ἐκκλησιαστοῦ (132.14:「伝道の書の偉大なる声」)、εὐηχος (よい響き [形]) といった表現もある。